

短歌 (投稿順)

遠き日の思い出写真見入る日々吾が教職の頃懐かしむ 皆野 根岸 詩子
 新緑を分けて急登を登りゆく二神宿す「両神山」 皆野 大澤 貴夫
 コンビニの上の富士山人気あり外国人に煩う日本 上日野沢 四方田利男
 相棒のわが耕耘機部品替え快調なるよ新緑の峡 三沢 眞下 杏子
 爽やかに光ゆらめく朝の庭庭木も花も朝露受けて 下田野 新井 節子
 おしゃべりを杖に山路を行き行きて観音様の御顔を仰ぐ 皆野 萩原 初恵
 散歩道物知りオパンと立話この家のバアチャン九十四でコワイ 皆野 戸塚喜久雄
 嫁と行き咲き誇る薔薇を觀賞す娘の持て成しの至福の時間 下日野沢 浅見 豊子
 どくだみは畑に攻め寄せ勢いに合戦のごと我鍬をうつ 国神 藤原マキ子
 生前に母の使ひし血圧計埃掃ひて我も使へり 皆野 打木 昭廣
 薫風に亡友も乗り来てクラス会最終回を十人で締める 皆野 引間 万亀
 幼木のハンカチの木に支柱立てハンカチ見せる日染しみに待ち 三沢 新井 民子
 足腰を鍛へむとして山坂を息に合はせてゆっくり歩む 三沢 新井 叶子
 なんも手に私は出来ていなくとも内なる炎青く揺らめく 皆野 太幡琉美花
 新緑の長き階段上りきて遠く江戸見る家康の墓 皆野 村田ハツ代
 アラカツが妙にマジメに切り出した「たのしい祭り作りたいたです」 皆野 石原 達也

俳句 榎本順江 選 投稿数 17 句

「征きます」の声よみがえる昭和の日 三沢 眞下 杏子
 (評) 作者は、出征兵士を送る式で何度も聞いた「征きます」の言葉。征く人、送る人の心の内は計り知れず、子ども心にも悲しい式だったでしょう。今や平穏な毎日を通して作者ですが、昭和の日の今日(四月二十九日)、忘れられないあの日の事がよみがえりました。平和な世の中であって欲しい、作者の思いが伝わってきます。二句目、庭中にはびこり悪臭があるため嫌われるドクダミ、民間薬としての用途が多々あり十薬の名の所以です。嫌われてはいるが花瓶に挿して見ると気品のある花に見えすてきです。花の気取ったところを見逃さない作者、さすがです。三句目、雲に覆われた盆地、雲海というこの素晴らしい景は下に街がある事を忘れさせます。雲の下では早朝に明かりがつき、そろそろ街が動き出します。早朝の美しい雲海を見下ろしている作者です。
 十薬の一寸気取って挿されけり 皆野 戸塚喜久雄 健康寿命つづく限りや露を採る 三沢 新井 叶子
 雲海の下に街あり朝灯す 上日野沢 四方田利男 庭先を真白に飾る花うつぎ 皆野 村田ハツ代
 新茶汲む喜寿の歩幅を幸として 三沢 新井 民子 青空へヒトツバタゴの白が押す 皆野 根岸 詩子
 万緑やりフォームの床張る響き 下田野 新井 節子 麦秋やコースを変える散歩道 皆野 根岸 詩子
 トレランに天辺駆けたかホトトギス 皆野 鳥 弘 トマト植う着果の萌し一段め 国神 藤原マキ子
 皆野 引間 千鶴